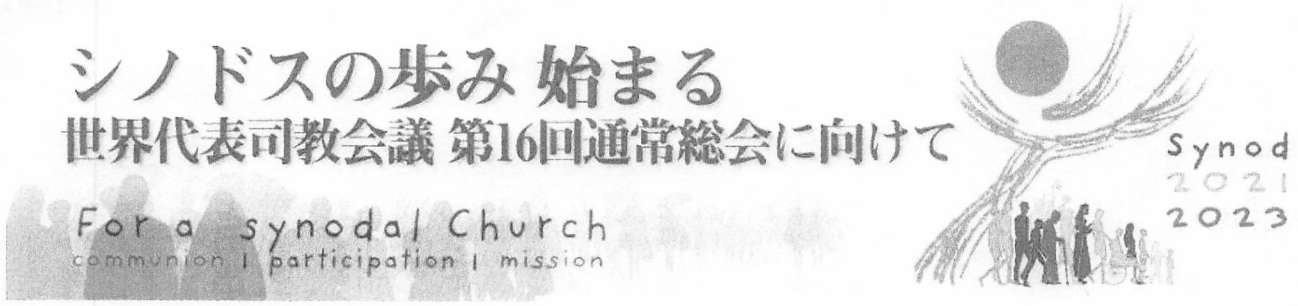
シノドスの歩み 始まる
世界代表司教会議 第16回通常総会に向けて



教皇フランシスコは、2021年10月10日、バチカンでの開会ミサをもってシノドスの始まりを告げられました。これにより、第1段階、地方教会レベルでの歩みが10月17日から開始されています。2022年秋以降、第2段階、地域・大陸レベルの作業に入り、最終段階、2023年10月のローマでの世界代表司教会議に向けて歩みが続きます。

教皇フランシスコは、シノドスのテーマとして、「ともに歩む[＝シノドス的] 教会のため　交わり、参加、そして宣教」を挙げられています。教会の神秘の神学的表現としての「交わり」と「宣教」の重要性を強調された教皇は、特に第二バチカン公会議は「交わり」を教会の本質として示すと同時に、すべての民においてキリストと神の御国を告げ、それを築くことを「宣教」として宣言している、と話されました。

「交わり」と「宣教」は、すべての人のそれぞれの立場からの「参加」を通した具体的な歩みを伴わない限り、それらは抽象的なものに留まってしまう恐れがある、と教皇は述べ、シノドスが真に実り多きもの、教会の真の表現となるには、皆の真の「参加」が必要であると語られました。

また、教皇は、シノドスは司牧的回心のための大きな機会を与える一方で、いくつかの「リスク」も抱えていると指摘しています。そのリスクとして、シノドスを中身のない表面上のものにしてしまう「形式主義」、高尚だが概念的で世界の教会の現実から離れた「主知主義」、今までどおりでよいと考え何も変える意志がない「現状維持主義」の三つに注意するよう促されました。さらに、教皇は、シノドスを恵みの時ととらえる中で、ここから得られる三つの「チャンス」を考察しておられます。

その一つは「共に歩む教会」を目指して、無計画にではなく「構造的に」歩むチャンス、もう一つは、皆が家のように感じ、誰もが参加できる場所となるために「耳を傾ける教会」となるチャンス、そして、兄弟姉妹たちの希望や困難に耳を傾けることで司牧生活を刷新し、「寄り添う教会」となるチャンスがある、と話されました。

神が教える新しさに開く「これまでとは違う教会」に向かって、謙虚に耳を傾け合い、共に歩むことができるよう、教皇は聖霊の助けと導きを祈っておられました。

那覇教区では担当司祭のマイケル神父が中心になって準備が進められています。那覇教区内の各小教区等の意見書（A4用紙枚以内）のデータファイルを2022年4月5日（火）までにシノドス連絡担当司祭へ Eメールで提出することが要請されています。また、来年5月の連休頃に教区内の諸意見を分かち合う「シノドス前会議」を予定していることや、そこに向けてシノドスの祈りと意見聴取のための質問集をすでに各小教区主任や修道会等の責任者宛送付してあるので、よく活用してシノドスの歩みを出来るだけ多くの人と共有をするよう要請がなされています。

洗礼おめでとうございます

コザ教会

2021年5月23日
　アン　譜久山エラスミレ（5ヶ月）
2021年9月26日
　フランシスコ　名嘉織部（4ヶ月）
2021年10月23日
　Mary：Komiya Jitsuko Trajano（1歳）
　マリ　コミヤ・ジツ子・チラジャノ